

平成 29 年度
第 1 回
総合教育会議議事録

日時 平成 29 年 6 月 1 日（木）午後 3 時 30 分～

場所 市役所東分庁舎 5 階会議室

第1回総合教育会議 議事録

- 1 日時 平成29年6月1日（木） 午後3時30分～午後5時15分
- 2 場所 市役所東分庁舎 5階会議室
- 3 出席者 いわき市長 清水 敏男
いわき市教育委員会 教育長 吉田 尚
いわき市教育委員会 教育委員 馬目 順一
いわき市教育委員会 教育委員 蛭田 優子
いわき市教育委員会 教育委員 山本 もと子
いわき市教育委員会 教育委員 根本 紀太郎

(ゲストスピーカー)

福島県立ふたば未来学園高等学校 副校長 南郷 市兵
株式会社いわきスポーツクラブ (いわきFC)
代表取締役社長 大倉 智

4 協議事項

- (1) 地域の次代を担う人材育成について (ゲストスピーカー)
- (2) 次期学習指導要領の全面実施に向けた取組みについて

1 開会

(司会)

それでは定刻となりましたので、始めさせていただきます。
本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。
只今より、平成29年度第1回いわき市総合教育会議を開催致します。
はじめに、清水市長がご挨拶を申し上げます。

2 市長あいさつ

(清水市長)

皆さまこんにちは。
平成29年度第1回いわき市総合教育会議の開催にあたりまして、ごあいさつを申

上げたいと思います。

吉田教育長をはじめ、教育委員の皆様には、日頃から、いわき市の子供達の健全育成、そして教育行政の向上の為に尽力を賜っておりますこと、誠に感謝申し上げたいと思います。

さて、平成 27 年度に設置致しました当会議も 3 年目となりました。これまで本市の教育を取り巻く諸課題について協議を重ね、平成 28 年 2 月には教育先進都市いわきの実現に向けまして教育大綱を策定し、いじめ防止に向けた体制整備や、奨学金返還支援事業なども実現に取り組んでまいったところでございます。

今後におきましても、皆様とともに教育環境の充実発展のために、協議を重ねてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日はゲストスピーカーとして、今注目のお二人をお招きさせていただきました。

お一人は、いわき FC を立ち上げた大倉社長でありまして、今、破竹の勢いでサッカー一会に新風を吹き込んでいるところでありまして、J1 のコンサドーレ札幌と 6 月 21 日に決戦を控えております。どのような試合になるのか、今からワクワク感があるわけですが、負けて元々って言い方はおかしいですけれども、勝ったらすごいことになるなど期待をしているところでございます。

また、双葉郡が、徐々に避難解除になっているわけでありますが、その中で頑張っているふたば未来学園から、南郷副校長がお越しになっております。

このお二人からお話を聞きながら、いわき市としても参考になることがたくさんあると思いますので、活かせるものは活かしていきたいと思っております。

今日はちょっと時間が足りないんじゃないかなと心配しておりますが、皆様には慎重審議をお願いいたしまして、私の冒頭のあいさつとさせていただきます。

今日はありがとうございます。

(司会)

次に教育長よりご挨拶をいただきます。

3 教育長あいさつ

(吉田教育長)

こんにちは。教育委員会を代表致しまして一言ごあいさつを申し上げます。

市長には日頃から、本市教育行政の進展にご理解とご協力を賜りまして、本当にありがとうございます。

本日、高等学校の PTA の大会がいわきで開かれておりますが、その市長のあいさつの中でもいわきの教育をアピールして頂いております。

常に市長からそういうお言葉をいただいていることは、我々も力強く感じているところでございます。本当にありがとうございます。

さて、先程市長からもありましたが、平成 27 年度から総合教育会議を設置して、これまで 8 回開催しているところでございますが、その中で様々な議論を通しながら、その共通認識に立った上で、新たな取り組みも始まってきていることをとても嬉しく思っております。

本日は、地域の次代を担う人財育成ということが芯になると思いますが、かつてない変革の中で、自ら考え、未来を切り拓いていくような人財を育成するっていうことは待ったなしでありますし、またそのことが今回の新しい学習指導にも理念としてしっかりと入っているものだと考えております。

そういう意味でも、本日いわき FC の大倉社長、それからふたば未来学園の南郷副校長の話というのは、我々がこれから、新しい学習要領に向けて、それを具現化していく上で、非常に示唆のあるお話になるのではと期待しております。

お話の中で様々なご質問などをさせて頂きたいなと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。お世話になります。

(司会)

ありがとうございました。

それでは、協議事項に移らせていただきます。

本会議の設置要綱第 4 条の規定によりまして、市長が議長となりますことから、会議の進行をお願いしたいと思います。

それでは市長、よろしくお願ひ致します。

(議長)

それでは、暫時議長を務めさせて頂きますので、ご協力のほどよろしくお願ひ致します。

はじめに、協議事項(1)地域の次代を担う人財育成について、本日お招きをしております、いわきスポーツクラブ大倉社長、並びにふたば未来学園の南郷副校長、それぞれのお立場からお話をお聞きいたしまして、その後、それぞれ 10 分程度フリーディスカッションの時間を設けまして、皆様からご意見を頂きたいと思っております。

それでは、さっそく大倉社長からお話をお伺いしたいと思います。

よろしくお願ひします。

4 協議事項

(大倉社長)

只今、ご紹介がありました大倉です。本日はよろしくお願ひします。このような場に呼んで頂きまして光栄でございます。ありがとうございます。

昨年、チームを立ち上げて 2 シーズン目に入りまして、少しずついわきの中に浸透し

始めているかなと実感しながら、日々活動しております。

本日のテーマは人財育成ということですので、内容をかなり抜粋して持ってまいりました。それが上手く当てはまるかどうか分かりませんが、お互い接点があって、何か相乗効果が生まれるようなことがあればな、と思いましたが、ちょっと話が行ったり来たりするかもしれませんが、我々の考え方、特に子供達の育成の話を中心にさせて頂きたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

いわき FC の全てがこの一枚と次の二枚目にありまして、スポーツの産業化と色々なところで言っておりますが、日本のスポーツ産業がアメリカからかなり遅れをとっていて、なんとなくスポーツ選手の強化とか施設は税金で賄っている、というようなものが、当たり前のようになっていて、健康とか人財育成はお金がかかるにも関わらず、日本にはそういう傾向があるところを、しっかりと産業化することで、何とか未来の子供達に再投資が出来ないかなというようなことを、実は目論んでいます。

それが「スポーツの産業化」というのを軸に街づくりの取り組みをしていきたいということと、人とスポーツを通じて、いわき市を元気にするというこのビジョンをしっかりと置いていきます。

スポーツを通じていわき市を元気にする、我々がスポーツを通じていわき市を東北一の都市にする、というような、そういった言葉をおいて、活動しております。

したがって、J1 に行くとか、他のチームに勝つということは確かにあるんですが、あくまでも我々はそれは結果であって、いわき市をスポーツを通じて元気にするんだということが我々の存在意義であるということです。

選手たちにも、特にインタビューなどを受けて、「目標はなんですか。」と聞かれた時に、みんな「J1 に行きたいです」、とか「JFL に上がりたいです」と言います。

そうではなく、それはあくまで結果で、君たちが活動する全てのことがいわき市にとって元気を与えるんだと、そういう風に答えなきゃいけないんだというような話も含めて、色々指導しているような状況であります。

この話は、昨年作った中学校一年生のチーム、来年作る高校生のチームに対しても同じようなスタンスでやっていきたいと思っております。

今後、これから出来るクラブハウス、商業型施設、将来的にはスタジアム作りなど、我々のブランド価値も当然上がるんですが、やっぱり地域と一緒に上って行かなければいけないので、こういった成長サイクルを作り上げていきたいと思っております。

特にファシリティを中心とした新しい日本だけのモデルケースを作っていきたいと思っております。

大事な三つのビジョンです。一番目、先ほど言いましたように、いわき市を東北一の都市にしたいと思っております。よく東北一ってなんなの、と聞かれるんですが、仙台に人口で勝とうという話ではなく、いわき市に住む人たち、特に子供たちが何か希望を持ったりとか、ここに住むことで、我々が街になにか誇りが持てるような、そんな存在に

我々スポーツの世界がなっていきたいというものを置かせて頂いています。

今日のポイントは、三つ目の人材育成の教養を中心に添えるというビジョンをしっかりと置いてあります。スポーツを通じて社会を豊かにする為に、地域と共に未来ある子供たちの成長を担うと明確に謳っております。従って、これをしっかりと実現していきたいと思っています。

具体的に何をするかというのを少しご紹介しますと、その前にちょっと姿勢的な話になりますが、あくまでも我々はサッカーというものを中心にスポーツを色々やっと思っております、選手も各監督も社長も含めて我々もスポーツ、いわゆるスタッフがフットボールから学んでいるといった姿勢を崩さずにやっていきたいという風に思っております。

とかく指導で、「俺の言うことを聞けと、右いったら右だ」というようなことではなくて、「我々みんな生徒である」ということを指導者含めたスタッフにも徹底していきます。

これがまず前提の姿勢です。その上で、昨年立ち上げたアカデミーですが、少々見づらいので補足しますと、昨年セレクションをし、中学校1年生のチームが今年立ち上がっております。そして、今年ユースの高校生をセレクションします。中学校3年生、つまり来年高校生1年生になる子たちをセレクションします。いま現状50人ぐらい、中学校3年生のセレクションの申し込みがありまして、半分が実はいわき市外、他県です。

茨城もいれば、実は福島ユナイテッドのジュニアユースの子が受けに来たり、一番多いのがJビレッジでプレーしている子たちですが、郡山もいますし、結構、市外・県外が割と多いなというような印象を持っています。

高校生なので、おそらくこちらにきて、ふたば未来学園もそうですし、受け入れが私立もありますし、そこに通いながら、おそらくプレーするんだろうな、というような予想がつきます。

昨年、それで言いますと、中学校のチームは約17人取りましたが、その内の4人が市外からです。お母さんが郡山、お父さんが引っ越しをしてきて、いわきに住んでいる方など。4人ほど会津から通っている子などですね、そろそろもういわきに引っ越そうと言っているようですが、そういった意味では、まずは福島県内の注目が非常に高くなってきていると思います。施設がすごく充実しているので、これからどんどん外の子たちが入っている、これもある意味、いわきの子供達に刺激を与えると思うので、いい傾向かなとも思いながら見えています。

そして、ユース、中学生と高校生の男子の方は、スローガンを「The smart athlete」という風においています。

これもJリーグでは、結構プロサッカー選手をつくりましょう、というのを置くんですが、我々は「The smart athlete」、語学・栄養学・睡眠学、人が生きていく上で大事なものを学ばせようと思っております。

その結果、プロサッカー選手は、1年に少し、5年ぐらい経つといい選手が入ってきて、そういう変化の中で生まれてきますので、プロサッカー選手をつくるってことを謳わずに、そういったことを謳ったスローガンにしています。

実は、女子の中学生のチームも始めました。これは、元々いわきにあったフェアリーズというチームが少し運営に困っていたものですから、我々が引き取りました。いわきFC ガールズ U15 として活動しております。彼女たちのスローガンは、「The athletics woman」ということで、「美しく強く、意志の持った女性を育てよう」ということで、我々も親会社のドームのウーマンズプロジェクトの考え方ですが、今なでしこリーグの女子、なでしこリーグといいますか、男子のユニフォームを着てみんなやっていて、結構ブカブカでやっているんですね。そうではなくて、もっとスリムにして、とにかく可愛く美しく、そのスポーツを嫌いにならないように、というようなコンセプトで、生涯女性がスポーツをしっかりと続けられるようなですね、最初の入り口をつくっていききたいというコンセプトを持っています。

色んな調査の結果ですと、日本の場合というのは、高校まではアメリカと日本の女性の参加率が40%ぐらいで一緒ですが、高校を出ると日本が10%ぐらい、アメリカが50%ぐらいに上がる。つまり高校までで女性というのは、スポーツやりたくないという状況で卒業していってしまう。

これって、本来あるべき姿じゃないよね、というようなことも我々背景に持っていて、入口で本当にキツイものではなくて、楽しくて、可愛くやんなきゃ面白くないんだよってというような、そして強く、強い意志のある女性を育てようというコンセプトで、中学生はやっています。

いわきですと今、17人我々抱えておりますが、いわきのサッカー協会に登録されている女子は、小学校一年生から六年生までで40人ほどしかおりません。

ですので、将来的な絵がまだちょっと見えませんが、高校に上がったたり、卒業した子がどうするかで、将来チームを作っていくって、なでしこリーグに出すというのは有りかな、と思っておりますが、今のところそんなことで活動しております。

なので、人財育成を中心に添えるというビジョンをこういった「The smart athlete」とか、「The athletics woman」という標語をベースに、しっかりと育てていきたいなと思っています。

ポイントは、一番下の三角形の下に「アスレチッククラブ」と書いてありますが、ここは運動能力を向上させるようなプログラムで、無料でグラウンドを利用できますので、解放して、よく肥満度が高いとか、スポーツする場所がない、などと言われておりますが、そういったものに積極的に起用していききたいと思っております。アスレチッククラブの目的は、とにかく楽しさを創造して、子供達全体の体力向上に貢献するというのを置いています。

背景としては、我々のビジョンが、スポーツをする、社会を豊かにするというもので

すので、一人でも多くの子供に持ってもらいたいと思いますし、いわきでなかなかスポーツをしたいけれども、時間的にできない、家庭的にできない、共働きの多いとか、そういうところを解決できるようなものを探していきたいと思っています。

色々話を聞くと、隠れた人材がいて、体力的に強そうなのにちょっと家庭的に裕福ではないからスポーツをできずにいるなど、そのような話も聞きますし、そういう子たちをとにかく引っ張り出して、人材を見つけていきたい、それがいわきの全体の底上げになるのかなと思っています。

なので、プログラムのほうにはこういった、走る、投げる、取る、掴む、というような。投げるのは、女の子がうちのガールズの子でして、サッカーと全然違うユニフォームを着て練習しております、こういった基礎的な、遊びながら楽しく運動能力を上げるようなプログラムを、小学校をターゲットに、4歳、5歳、6歳、7歳、8歳、9歳の4カテゴリーに分けて、それぞれのレベルに応じて、プログラムをやりたいと思っています。

ただ、7月の15日以降にクラブハウスが出来るので、プレオープンって形でやろうと思っています。フタをあけてどのくらい人がくるのか、まったく想像が付きませんので、それを見ながら、こちらの体制は自動車なども整っておりますので、なんとか実現して、少しずつ人を増やしていきたいと思っています。

場合によっては、バスを通さなければいけないのか、色んな問題は出てくると思いますが、なんとかこれを実現していきたい。ここから、野球でもゴルフでもサッカーでも自分の好きなスポーツにいつくれば良いなというスタンスでやっていきたいと思っています。全然、サッカーとか関係ない、基礎的な運動能力を上げていきたいと思っています。

その活動拠点として、全体のパスですが、我々の持っているグラウンド、湯本に出来上がっているグラウンドを活用して、ナイター設備も付いておりますので、使っていききたいと思います。

今現状、昨日の写真ですが、実際もう出来上がっております、6月の10日にプレオープン、7月の15日にオープンということで開きます。

3階部分には飲食店が入りまして、クラフトマンという地ビール屋さん、いわきFCカフェはパンケーキを出す、今半さん、矢場とんさん、それから地元のお寿司屋さんということで、5店舗7月15日に開きます。

ここも元々、子供達のサッカースクールをやる時に、お父様、お母様達が寒い中で待つのはということで、上からコーヒー飲んで待っていたらという、欧米型の発想の中から、どんどん話が大きくなって商業施設化されてしまったということです。これをなんとか集客して、回していかないと将来のスタジアムビジネスの知識が蓄積されていきませんので、少々不安な部分もありますが、頑張っって運営していきたいと思っています。

また、実はグラウンドで、今までこんな活動しましたという1分、2分くらいの映像

がありますので、見ていただければと思います。

(映像)

こんな活動を積極的にやっっていこうと思っています。

7月の15日に日本学生選抜、サッカーの学生選抜と試合をします。

彼らも事前合宿ということで、法政大学と東大アメフトが約400人、いわきで合宿します。そこに400人入って、グラウンドで合宿をするというような、とにかく色んな人が入ってきて、受け皿がありますので、そこで色んなスポーツイベントをしてきたいと思っています。

色んな姿勢の中で、一番大事にしていることは、子供を育成する上でとか、ここ15年ぐらいJリーグにいて、小学校6年生の子がプロになって、一人前になって移籍していくっていう過程をずっと見てきている経験があるので、彼らが、どういう選手が伸びるのかなというこの二つに尽きる、というところをピックアップさせて頂きました。

今日の会議に当てはまるかどうか分かりませんが、こんなことを思いますとか、スカウティングですごく大事にしていることには、実はこの4つがありまして、徳と才能がある子は絶対捕りに行くんですが、ない子は捕りに行かないんです。大事なのはたぶん徳があって、才能がない子。こちらの方が伸びるという。もしかすると、1番より2番の方が伸びていくのではないか。こういう世界観があるので、今現状ではサッカーができない子でも、将来を見据えた時に、この子ガラッと変わるよねという見極めを大人がしてあげなければいけないかなと思います。

傾向として、4月生まれの子が体力的に強い。捕ろうと思うと、なんとなく4、5、6月の子が集まってしまう。でも、そうではなくて、遅生まれの子でも将来伸びていく子はいるので、その見極めを大人がしっかりしていかなければいけない、ということは、我々の中での最大のポイントになっております。

従って、中学校とかユースのセレクションをやる時もそういったポイントでやっています。これは、昔、日本でも言われていましたが、こういう力がないのはダメだよ、というような、アルゼンチンではこういう言葉が、サッカー界では使われています。

割とプロサッカー選手にも言っておりますが、こんなこと大事だよ、と自分でコントロールできることを集中してやりましょう、と。

例えばサッカー選手ですと、監督が選ぶのに、自分で11人のメンバーに入れませんが、そんなことでウジウジしてもしようがない、前向いてやろうよ、と。こんな話も実は、プロの選手にも、今の選手にも、アカデミーの子にも伝えたりしています。

その中で、もっと分かりやすい人の言葉とか、一番は体験だと思いますが、他人の有名選手の言葉というのはズバリ刺さるので、こういったことをしながら、アカデミーの子であったりとか、プロサッカー選手を育てるということ、色々試行錯誤しながらや

っているというご紹介です。ここに尽きるのかなと。一步踏み出さない、というような話をしつつやっています。

従って、いわき FC のビジョン、常にある、教育・人財育成に取り組むということ、ズバリそれが全ての生命線にありますので、一緒になって未来の子供達、今の中高生、もしかすると大人の方、シニアの方もこのグラウンドでグラウンドホッケーをやっていたり、ヨガをやったり、健康教室をやったりとか、全てにおけるスポーツにおける何か切り口を実現していきたいと思っておりますので、是非皆様と協力してやっていきたいと思えます。今後ともよろしくお願ひします。

以上でございます。

(議長)

はい。ありがとうございます。

今までいわき市になかった胎動が起きつつあるのかな、と非常に期待をしております。

ここから、フリーディスカッションになりますので、委員の皆さんからお聞きしたいこととかありましたら、ご発言願ひたいと思ひます。

時間が限られておりますので、早めにお願ひいたします。

(根本委員)

やはり興味を持ったのは、いわき FC アスレチッククラブというところで、サッカーだけではないよ、という大きな目を持ってくださっていると思ひますが、なかなか今までも、いわき市でも地域総合型スポーツクラブというようなものもありますが、なかなかその競技団体ごとの垣根があつたりして、うまくいかないところもあるかなと思ひますが、逆に全然関係のないところから、こんなところ君は優れてるんじゃないの、というようなことで、色んな競技団体を紹介して頂くとか、そんなこともして頂けるといいのかなと思ひながらお話を聞いておりましたが、いかがでしょうか。まだ始まってないところかと思ひますが。

(大倉社長)

元々、株式会社いわきスポーツクラブは、総合型スポーツクラブを目指して、サッカーチームはいわき FC という名前、ちょっといわき FC がすごくフォーカスされておりますが、今色々とラグビー協会ですとか、ゴルフの小名浜の大田紗羅さんであつたりとか、彼女たちがトレーニングしたり、アンダーアーマーがサポートしたり、これから色々なスポーツにチャレンジしていきたいと思ひています。

サッカーチームがメインですが、基本的に先ほども申し上げましたが、プロサッカーチームを作りますよ、ということですか、今のサッカー界で小学校とか中学校でグッと詰め込む、その指導のやり方というのは絶対破綻が来ますので、そうではなく、スポ

一つをするということがまずベースにありますので、そこにまず起用していきたいので、積極的に色んなことに取り組んでいきたいと思います。現に色んなところと今コンタクトがありますので、やっていきたいなと思います。

(根本委員)

今、おっしゃってくださったように、私も小さい時から一つの競技だけっていうのが日本は多いと思うんですが、やはりそれだけではないと思います。

先ほど大倉社長さんの中で、高校時代まででもうたびれてしまい、その後もうやらないというのは、女性というお話もありましたけれども、男性でも同じような傾向があるかな、と思います。

ですから、もっとおおらかにして、段々自分のライフスタイルに合わせて、スポーツを通して、人生を豊かにしていくように、ご協力というか、逆に色々教えて頂ければありがたいな、と思いながらお話を聞きました。

(大倉社長)

アカデミーのテストやった時、中学生ですが、みんなにゴルフと野球のキャッチボールと相撲と短距離などをやりましたが、ゴルフとかお父さんに連れられて行った子はなんとなく、やったことない子でもセンスのある子は5球までやってたら打てるんですね。その子はサッカーも上手い。野球も当然。今野球でキャッチできないんですよ。空間認知がほとんどできない。その子たちが普通にサッカーをやっている、というような。そういうものをなくしていかないと、体育5の子をつくっていかないと、スポーツ選手としては成功しないでしょうし、そのベースにあるのは、何かもっと提供していかなければいけないなと思います。

(議長)

はい。ありがとうございます。

(山本委員)

大変、お話を聞きまして心強いなということを感じております。

その中で、先ほどありましたが、子供達を育成する上で、「徳があつて才能がない子」というお話がありました。これは学校の教育の中でも通じるなということを感じさせて頂きました。

それから、「今の自分を知り、やりたいこと、なりたい姿を想像する。そして、何に対しても100%取り組む、悩んだらコントロールできるものに集中する。あとは、勇気をもって一步踏み出す。」これを聞きまして、これからお話がありますが、これから次期学習指導要領の中で目指す子供達の姿が授業の中にありますが、アクティブラーニン

グという言葉、一人ひとりが自分の興味のあるテーマを持って、課題を自ら見つけて、解決していくような人間になることが、最後に目指す姿なんですよね。これはスポーツを通して、そこに向かうな、というのを強く感じました。

ただ、心配されるのは、子供達の中でいわきの子供達よりも、県外から希望している子供達が多いようですので、いわきの子供達がもっと積極的に参加していくにはどうしたらいいかな、と感じます。

(大倉社長)

最初はそういう傾向になってしまうんですね。段々レベルが上がっていくと、底上げされてくと思います。最初は興味本位で外から来ると思います。

ただ将来的には、いわき出身・福島県出身の子がプレーしているのが一番いい絵だと思っていますので、必ず、昔は浜通りサッカー王国、Jビレッジも含めて、小名浜一中、二中の全国大会の、高校選手権の高校が出れなくなっている状況の中で、必ずそういう時代が来ます。

だから、根気強く情熱を持ってやっていくしかないかな、と思います。

(山本委員)

よろしくお願ひ致します。

(大倉社長)

こちらこそ、よろしくお願ひします。

(議長)

はい、蛭田委員。

(蛭田委員)

震災以降、小学生・中学生、ちょっと体力が落ちているっていう心配がいわき市でありましたが、このようにスポーツの根底、基礎を学ぶということで、実は私そんなにスポーツが得意ではありませんが、やってみたいなんて今委員に伝えたところなんです。今度7月15日にFCパークがオープンするということで、先ほど山本委員と「一緒に行ってみる？」なんてお話をしました。ぜひ誘って頂きたいと思います。よろしくお願ひ致します。

(議長)

観るスポーツもありますから。赤いユニフォーム来て、こうやって。
馬目委員。

(馬目委員)

教育のところで、知・徳・体という言葉が前から言われておりますが、知・徳・体は確か、知と体を入れ替えた方が人間の人類学的にその方が正しいのではないかと常々思っています。

やはり、身体があって、そして徳があって、そして才能・知恵があるという、これが教育の順序ではないかなと思っていて。そのような考え方をに入れて頂いたというのは、非常にこれからの教育の方針も、スポーツを介して変わっていくのかなと、つくづく感じました。よろしくお願いします。

(議長)

教育長。

(教育長)

社会性のある世界基準の政策、これはやっぱり大事ですね。これから子供達が育っていく中で、世界基準を意識しないと、いわき基準だけではダメですよ。日本基準ではなく、世界基準ということを常に指導する側は考えながらやらないといけないと思います。

それから、レジリエンスですが、震災以降、大事にしていかなければいけないと、私もときどき校長先生方にお話をする時がありますが、そのために様々なことに興味を持つなど、そういう安定したことが強いと言われますので、そのような子供達の指導は充実させていかなければいけない、という話をしています。

本当に今話を聞いていて「あっ、そうなんだ」と、非常に学ぶべきことが多くて、今いわきでこれからやろうとしていることが、本当に参考になることがたくさん、勉強になりました。ありがとうございました。

(議長)

他に。はい、どうぞ。

(根本委員)

やはりスポーツの話題というのは、例えば一つの学校にしてもそうかと思いますが、中学校なら中学校で中体連などありますけれども、そこで成績が良かったりすると、学校全体が盛り上がるとか、そういうこともあると思います。小さい単位で言っても。それを大きくした感じで、やはりスポーツというのは、人間を元気にしたりとか、感動させたりとか、そういう力がとってもあるなと思っておりますので、それを、スポーツを通していわきを元気にする、ということで、いわきを選んで来て頂いたことに感謝した

と思いますし、我々も学んだり、協力していきたいなど改めて思います。

(議長)

昨年、市制施行 50 周年という節目の年を迎えましたが、この年を前後に、株式会社ドームさんがいわきに物流基地を作って頂いて、FC を立ち上げて、しかも東北一の都市を目指すという動きが始まったというのは、次なる 100 年に向けて非常に大きなことではないかな、と思っています。

いわき FC がこれから活躍するようになって行けば、もう平とか小名浜とか勿来とか、そういった地域うんぬんではなく、みんなでいわき FC を応援しようという一体感というのがさらに醸成されていくのではないかと考えておりました。こういった形でいわきを応援して頂けるということ、市長としても大変うれしく思っています。今後ともどうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、続きまして、ふたば未来学園の南郷副校長より、お話を頂きたいと思ひます。よろしくお願ひします。

(南郷副校長)

手元の資料をご覧いただきながら、お話をさせていただきます。

本日の大倉社長のお話を伺いまして、いわき FC ができて、活躍をしていくと、おそらく、子供達の中には、いわきというこの三文字の言葉の中に込められたプライドとか自信というものが相当付いていくんだろうなという風に思ひます。

なお、教育の世界では実は、サッカーより一足早くプライドが醸成されていると勝手に思っております、わたし今、ふたば未来学園の副校長をさせていただきますが、震災発災当初から、いわき市含めた、双葉郡、福島県全体の、復興の担当として足しげく通わせていただく中から、本当に多くのことをいわきの教育委員会のみなさんから教えて頂きました。あるいは、いわきの子供たちから教えて頂きましたので、わたし今回こちらに出向という形になった時に、いわきに来れるということで、すごくワクワクしたというか、いわきの教育環境で自分の子供も育てられるというのは、大変うれしなと思ひて、着任をしております。

ですので、私が何か大上段にお話しできることはなくて、今日お話しさせて頂く本校の取り組みというのは、その多くがいわきの今までの取り組みの中から、学ばせて頂いて、またそれを学校外の取り組みもいわき市含めてございましたので、それを徹底的に学校の中でやってみたら、こうなりましたということの実例をお話をさせていただきますと思ひます。

下のスライドをご覧いただきますと、1 ページ・2 ページですが、双葉未来学園の双葉郡の未来を原子力災害から、復興を担う為の学校と、双葉地区の学校という風にとら

えられがちですが、実は円グラフをご覧いただくと、2割、だいたい90人ぐらいの子が、生まれも育ちもいわきの子達です。

加えて、また同じく18%、これも90人ぐらいでしょうか、双葉郡出身でいわき市で震災後、中学校生活を送り、お世話になった。昨年度の入学生ですと、いわき市で生まれ育ったという、純粋なるいわきの子が25%ほどおりましたので、この割合は徐々に高まってきているというような状況であります。

私たちの方で、学校を立ち上げるときに一番考えたのは、40年、50年先の未来のことです。やはり、この大変な災害に直面をして、明日どうなるのか、一刻も早く戻してくれという思いが、地元の皆様の本当の思いだったと思いますが、あえて、廃炉に40年、50年かかるとなると、今の本校に高校生達が、60歳ぐらいになるような時代までかかっていくということですので。そしてその時代は今までも、いわき市の創生戦略なんかを見ても、人口動態を含めて大きな変化がこれから起こってくると。

本当に元に戻すだけでいいのだろうか、本当にその学校が元の地域に戻って、教科書で仲良く友達と学びあえるだけで、未来はあるのだろうか、ということを実際に議論して創ったのが、この学校の生い立ちでありました。

ですので、建学の精神は「変革者たれ」という言葉になったのですが、変革者というのは、今までの時代を反復していく、あるいは正確に記憶をしたものをまた再生していくという力ではなくて、何か変化させていく、イノベーションを起こしていく、それがある意味、異端を含むかもしれませんが、変革をしていくという人間を育てようということが、この学校の建学の中心的な価値観でございます。

A3の別紙でお配りしている資料ですが、是非このことをご紹介させて頂きたいと思っております。

「変革者たれ」と言っても、先生方は一体何のことだ、というのが正直なところですよ。2年前に開校した時に、教員が全員初めて集まりまして、変革者を育てよう、この学校のカリキュラムはこれだ、この学校はこれまでの学校とは違うんだ、といっても何も分かりませんので、まずは教員皆で、「じゃあ3年後、今日の前に入学してきた子たちがどういう姿になってほしいか」、ということをお互いに出し合おう、ということで、あえて白地で、ポストイットで出し合いながら議論をして、それを後ほどまとめたのがこちらの表でございます。

見方としては、縦軸に、上から知識、それから、技のスキルですね、色々なプレゼンテーションの力ですとか、人と協力をしていく様々なスキル、これテストで測ることはなかなか難しい力ですけど、そして、その下が先ほどの徳ですね、人格・キャラクター、これは大切だと。さらにその下に、自分で学び続けて自分のことを成長させていくようなメタ認知の力というのを縦軸にとりました。

それでこの段々レベル1からレベル5まで右に能力が高まっていくと。そんなようなことで、段階も整理していきました。

レベル5というのは、なかなか県内の高校生ではないな、というような、そういうレベルをあえて設定をしています。

先生達が多く、これは大切だ、こういう力を育てたい、と言ったのは何かというと、知識ではなくて、人格のところのHの寛容さ、というところでした。

寛容さのレベルの5とか4をご覧いただくと、考えの違う他者の意見や存在を受け入れられるとか、考えの違う人はユーモアを持って受け入れられるということがありますが、やはり双葉地区出身の先生も多く着任をしましたので、これは心の底から出た言葉だったと思います。放射線が安全か危険か、あるいは帰還するか避難し続けるか。東京電力と漁業者とかですね。様々な対立に苛まれ続けた数年間の中で、相手を論破して、やり込めても何にも解決しませんよね。誰も幸せになりませんよね。というようなことを感じてきた時に、やっぱり、教員の言葉を借りると「そういう考えの違う人も受け入れられるあたたかさ」というような言葉を使っておりましたが、それがやっぱりベースにあった上で、色々な人と協力をする力とかが、発揮されるべきだろうと。そんなようなことを言っておりました。

あと、多く挙げられたのが、Dのスキルの表現力・発信力とかですね。これは、レベル2ぐらいだと、当然指名された時でも、自分の考えを言えるってということがありますが、やっぱり、本校の生徒が外に出ていくと、国外でもあるいは他県でも、率直にやっぱり聞かれますので、「福島、そこ住んで大丈夫なの」と。その時に、口をつぐんでしまったり、言葉を濁してしまうと、それは風評風化に直結いたしますので、突然振られても、自分の言葉でちゃんとと言えるように、ということがやっぱり大切だと思います。

それが右にいきまして、レベル3ぐらいになったら、データを使って言えると、よりいいかもしれませんが。実は一番レベル5、右側で「熱意とストーリー」という言葉を入れたんですけど、データで放射線のことを説明したって、納得する人は、実は少ないかもしれません。

広島の前原の死者数を正確に記憶している人はあんまり数としてはいないけれど、「はだしのゲン」であるとか「黒い雨」という物語がやっぱりみんな記憶をして、心動かされるということで、物語・ストーリーをもって伝えられるっていう力もやっぱり重要なんじゃないと。こんなような形で、具体的に私達の学校が育てていく、すなわち、次代のこの地域を担っていく人たちに必要な力は何なんだろう、ということを議論してまとめたのが、これでした。

もしかしたら、小中学校の先生達がこういうことを意識しながらご指導頂いている局面もあるかもしれませんが、高等学校が目の前に迫っている大学入試であるとか、就職試験というものに、どうクリアさせるかという切実な問題がありますので、あえて数十年先を見据えて、このような議論をしていったと。これをやって、初めてその変革者というイメージが教員の中で、教員がやっぱりやるべきだと思いますね。各学校がやる

べきことだと思います。

私達の学校は、この地域とか、この地域の未来を見据えた時に、どういう人を育てるのか、ということを実際に考えるべきだ。全国、金太郎飴で確かな目標とか、進路の実現とっている場合じゃない、という風に本当に思います。

具体的に生徒が取り組んでいる学習が、1枚おめくり頂いた、スライド番号4ページ以降に書かせて頂いています。

入学した生徒達は、最初に7人ぐらいの少人数のグループに分かれて、色んなところ取材に行きまして、あるチームは役場に行きますし、あるチームは商店に行きますし、あるチームは東京電力に取材に行きます。

そこで、復興の課題を探してきて、それを演劇の内容にまとめるというような学習をしています。具体的にこの下の写真は、なんか掴みかかっている図がございますが、シナリオとしては、彼らのグループが作ったのはどんな台本かといいますと、東京電力に取材に行ったチームの台本で、この3人は昔からの友達だったけれども、震災後、再会をしたら、右側の子は農家で、風評で苦しんでいて、左側の子は、避難で失業して、真ん中の奴があらうことか東京電力で働いていやがった、と。「お前、なんで働いてんだよ。お前のせいで、こんなになってんだろ」と掴みかかっている図です。

ひとしきり責められた後、この真ん中の奴が「そんなこと言ったって、俺だって家に帰れないんだ」と、「俺は今、この仕事に賭けてる。俺は誰にこの怒りをぶつければいいんだよ」と、罵倒してですね、「そんなこと知るかよ」と一蹴されて終わり。というのは、非常に短い7分ぐらいの劇ですが。彼らになんでそんな台本になったのかというのをちょっと聞きました。

東電を擁護してほしくて、東電に取材に行かせているわけではないので、どういうことを考えたのかということを知りましたが、真ん中の子は震災後、他県に避難をして、中学校に行けていませんでした。不登校になってしまって。本当に東京電力を憎んでいるとって憚らない子でした。

それが、この役をやっていたのですが、彼曰く、「初めて東電の人の話を聞きました」と。「生でやっていることも分かって、感謝の気持ちも抱きました。人として好感が持てた」と言いました。「でも、東電は憎いと」と言いました。「自分がどっちの立場なのか分からなくなった」という風に言いました。東電に理解を示すのか、あるいは憎むのか、ですね。

実は、「コノヤロー」と掴みかかっている子の親は、東京電力で働いているようで、僕たち知りませんでしたが、そんなこと彼らは話し合いながら、この台本を作ったそうです。

やはり世の中、現実社会というのは、完全な白か黒とか、善か悪とかというのはなくて、様々な多面的に課題を見つめて、じゃあどうしようか、というところから始まっていくと思いますので、先ほどの寛容性の話ではないですけど、こういったことを出発点

として、学習をしております。

だいたい一年生は30時間ぐらいやりますが、週2時間の授業で徹底的に悩むということをやっていきます。

1ページ飛ばしまして、6ページをご覧くださいますと、2年生・3年生になりますと、2年生でも3年生でも週3時間、こういったプロジェクトを行なう時間がございます。これは、1年生の時に見つめた、新規の課題というものを、じゃあどうやって乗り越えていこうかということ、何やってもいいんです。自分たちで企画を、チーム編成も含めて取り組んでいきます。

例えば、左上の何かこう、モノを作っている子はですね、ドイツでパッシブハウスという省エネルギーハウスかつ再生可能エネルギー、色んなものが付いていて、消費する電力より作り出す電力の方が多いという家がですね、ドイツのブライブルックというところがありまして、それを見てきて、これだ！と。

今まで原発の福島だったのを、再生可能エネルギーの福島にしていくためには、ということで、3Dプリンターでモデルを作って、色んな温度変化の実験などを繰り返しているグループもございます。

あるいは、右側の本当に伝えるべき情報は何かを考え、発信するというチームは、福島を発信する映像を作るとか色んなことを試しにやっていたのですが、行き着いたのは結局、「福島」とカタカナやアルファベットでインターネットを検索するとですね、画像を検索すると、オドロオドロしい色んな画像が出てくると。その中には福島のものじゃない、画像も混ざっていると。

さらに、ふたば未来学園も、ツイッターとかで検索をすると、ときどき学校批判が、「あんなところに学校造りやがって」ということが書かれたりする、というのをまさにみんなで見ているという、大変シュールな画だなと思って、私は写真を撮ったのですが。

彼らは、それを分析しまして、結局この情報を発信している人は、福島を批判しているのではなくて、原発政策に反対だったり、今の政権に反対だったり、何か意図を持って、こうやって発信しているな、なんてことを分析したり。そこに対して、私たちは何をするかということで、SNSのアカウントを作って、自分たちの目を見た、高校生なりの視点の福島を発信するというようなことをSNSでやったりしています。

こういう、彼らの中で、いかに外の人に福島の課題を自分事になってもらうか、あるいは、外の世界の問題を私達は本当に自分事として、世界基準に考えられているのか。これは結構、彼らの中でテーマになっていまして、右下は先日の演劇部の公演ですが、こういう生徒達の思いとか、実質ワークですね、台本にして、これは部活動ですね、東京で公演をしたりしております。

別紙で、チラシをお配りさせていただきましたが、今回もまたいわきPitで人生ゲームというタイトルになっていまして、今回、この主役もいわきの子だそうです。いわき市出身で、生まれも育ちもいわきだったのですが、3.11の時は海外に、お父さんの

仕事で住んでいらっしやって、「震災を自分事として、私は本当に感じられているのだろうか」というコンプレックスを自分の中に抱えていらっしやって、それに向き合いたいという事で、わが校にきた子がいるんですが、その子の実は、葛藤をそのまま台本にして演じると聞いております。

このような形で、2年生・3年生は取り組んでいます。裏面をご覧くださいますと、国連本会議場の写真がありますが、生徒たちは海外にも出て行って、今のような自分達の実践や将来像について、発信をしております。

この春には、先程の様々な2年生が行なっている、復興のプロジェクトの代表を連れてですね、国連本部に行つてまいりました。

その場で福島のことを伝えるだけでは、やっぱり世界には伝わりませんね。それは、国連の日本人職員の方にも、その場で教えていただいたのですが、やっぱり面談をした人も、難民経験をされていたりとか、ご家族を殺害された経験をお持ちだったり、大変な課題が世界にはありますので、うちの生徒達が、私も驚きましたけれども、自分達もある意味、避難民であるということを手掛かりにですね、あるいはいわきの子もおりましたが、受け入れた側として、難民問題とつなげながら、福島の課題を語つて。あるいは9.11メモリアル、同時多発テロのメモリアルも見ましたが、その時の印象を広島の原爆資料館の印象とつなげながら語つたり、大変説得力のある発信をしてくれました。

一方で、あんまりカッコイイことばかりも言えませんので、正直に申しますと、英語でのディスカッションは本当に難しかったです。

世界中の同世代と議論をしましたが、やはり海外の子は、中身がなくてもどんどん発言をする。うちの子どもたちは、そんなに語ることがあつて、涙ながらに小グループのディスカッションで語りますが、その会場ではなかなか勇気がなくて発言出来ないという事がありました。

ちょっと、一個ヒントとして次のページはですね、「地球規模課題」という、謎の絵がありますが。これは、私たちがニューヨークで行つた、国連国際学校という、これは国連の職員のお子さんたちが大勢通っている国際学校ですが、その高校生が学んでいる教科書です。日本語の授業で学んでいる教科書ですが、3. 地球規模課題、東日本大震災と原発事故の問題、自然災害とその防災、と。なんかこう、日本語としては極めて怪しい部分が色々ありますが。でも、その教科書には15ページぐらい原発事故のことが書いてあります。

やはりこれを見た時に、自分達が語りたいこと、本当に語りたい内容で、その英語を学んでいく、ということの大切さというか。「難民の受け入れを拒否する」とか、「今は放射線量は」とか、英語で言えといきなり言われてもなかなか難しいと思いますが、ということを感じたので、本校にALTが一人おりまして、彼は国際関係を学んでいたということもありますので、その後少し授業を変えて、この春から、徹底的にその「福島の課題」であるとか、難民問題を英語でディスカッションするというのをやり始めて

いるところですよ。

こんなことを重ねながら、10 ページのちょっと円グラフ、チャートがございませうけれど、これは段々、一期生は4月から3月にかけての一年間で徐々に成長していますよ、というような図がございませう。

私達のその学校の、次のページですね、11 ページでしょうか、取り組みとしては、この右側の図が、今お話をさせて頂いたことをまとめているものですが、上段の未来創造探究というのが、いまお話をさせて頂いた様々な生徒たちの活動です。探究1という横矢印が演劇の取り組みで、探究2という長い2年に渡るものが、週3時間に渡る、計6時間のプロジェクト学習です。

そんなことばかりやっているのかというと、そうではなくて、やはりその下に教科学習がありまして、色んなプロジェクトをやったり、議論をしても、現代社会の知識がなければ、全然話が深まらず、ツルツルしますし、国語の力がなければ、議論も思考も深まらないので、私達が今すごくこだわっているのが、教科と縦の上下の矢印、往還を上手く取っていくと。なぜこんなことをやるかということ、一番上に楕円形がありますが、先程のループリックはやはり絶対育てなきゃいけない力だと思っていますので、これはあの教室で教科書からだけ学べる力かということそうではないので、その為には実社会に飛び出して、実践をして、成功したり失敗をする中から身に付くものもあろう、ということ、必然的にこういう時間が必要になって、だいたいカリキュラムの10%弱ですね、全体で96時間の単位数がありますが、そのうちの8単位はこうした活動に割いております。

その下段ですが、それをやるのは、本当に大変でございまして、教員研修は、12 ページですが、本当にたくさんやっています。

私達、校長とか副校長主催でやっておりましたが、この春からは教員達が自主的なアクティブラーニング勉強会をやります、と言いまして、3、4人でやりますので、校長と副校長と教頭は来ないでください、と。なるほど、そういう事もあるな、と。

でも、後から聞きましたら、第一回目、このあいだ二十数人参加したそうで、とても今寂しい思いをしておりますが。でも、こうしてやっぱり検証を重ねていかないと、その教えない指導、生徒達が挑戦していくことを後押しする指導っていうのは、正解を知っている教員は、知らない無知な子供に教えるっていう違う概念ですので、やっています。

それから、ICTは、最近ホントに活用が進んできまして、タブレットを全員に配布して、無線LANを整えておりますが、結局、教科の学習もあって、テストも迫ってきます。そして、こういうプロジェクト学習もやっていて、部活もやるという風になると、いかにその夜の時間とか、合間の時間を効果的に使っていくかということが重要になってきますので、授業内のみならず、帰宅後もクラブ環境でディスカッションをしたり、レポートをアップしたりということ、今やっています。

さらに、右側の学校外との密接な協働ですが、教員だけではきめ細やかな指導の手が足りませんので、この4月からNPOの職員の方が、常駐5名、学校内に常駐をしてくださる環境を整えました。

これは、NPOカタリバという全国的にもとても大きな、社員が90人ぐらいいる教育支援のNPOですが、こうした所の方々に常駐いただいて、放課後の学習支援、本当に難関大に行く子から、中学校行けてなかった子まで様々いるものですから、補習教室ですとか、色んな取り組みを今やっけていただいているところです。

このような取り組みを、13ページはその普及ということですが、私達の学校は、やはりこれからの学び舎の、先んじてちょっと挑戦してみよう、ということでやっておりますので、それをいかに広げていくかということで、下線を引いておりますけれども、今年度はですね、県内の全ての高校の先生方が本校に来校して、こうした授業を見学したり、研修をして、また各校に持ち帰るといような研修を実施をすることとなっております。

これも、最後に14ページで、これは昔、私が色々なところで発する時に使っていた資料ですが、本当にこうしたいわき市の様々な取り組みに教えていただいて、やってきた活動です。

先ほどのプロジェクト学習は実社会での挑戦を本気でやって、成功や失敗をするというの、OECD東北スクールなどが下敷きになっておりましたし、いわき志塾はホントに良い取り組みなので、実は併設中学校では絶対カリキュラムに入れたいなと思っておりますし、こういった取り組みが全ての下敷きとなって、学校で今取り組ませて頂いております。

是非、いわきそれから双葉地区で共に高まっていく学び舎として、まだまだ私達も試行錯誤の段階ですので、色々ご指導頂きながら、本気でこの双葉地区というか、これはあまり公の場では言えませんが、やはり広い目で見て、なにになに町だ、なにになに村だというのは、行政の区分けでしかありませんので、数十年先を生きていく時代の彼らにとっては、もっともっと大きな目で、世界まで目を広げて、行動して学んでいく必要がありますので、是非ご一緒に取り組んでいければなと強く思っております。色々ご指導頂けるかと思えます。

(議長)

はい、ありがとうございました。

フリーディスカッションになります。感想でもなんでも結構ですので、委員から一言ずつ。はい。

(根本議員)

質問ということになるかもしれませんが、2ページ、地域の復興の課題を見つめる、

最初の1年生の時ののですが、30時間というのは一年間で30時間ですか。

(南郷副校長)

そうですね。

(根本委員)

そうすると、週に1時間ぐらいこういったことをして、この写真にあるような発表は、一年の終わりの時の発表というようなことでよろしいでしょうか。

(南郷副校長)

そうですね。週2時間の授業でやっておりますので、ギュッと濃縮をしてやっております。

(根本委員)

あと、アクティブラーニングの福島県の先生方への研修会ですけど、いつ頃なされる予定ですか。

(南郷副校長)

これは、9月、10月か11月だったと思います。

(根本委員)

高校の授業の活性化っていうのは、必要なかなと思っているものですから、期待しているところです。よろしくお願い致します。

(議長)

山本委員さん。

(山本委員)

前にも、一年前でしたか、伺わせて頂きまして、見させて頂いた時も、なんて子供達は幸せだろうなと感じましたが、今お話を聞きまして、先生方が過去から現在とか、未来を見通した上で、現在を見ている。

また、学校を取り巻く地域社会や世界の動向を踏まえた上で、今自分達、そして子供をその中心に置いているというのを、今説明を頂きまして、また深く感じさせられました。ありがとうございます。

その中で、これから、今南郷さんがお話したことが、これから、特に改訂指導要領の中で出てくるものがたくさんあって、それをその流れで、今ふたば未来学園ではおやり

になっているわけですが、アクティブラーニングと出てきますけれども、その中でどうしても知識だけを講義などで覚えるのではなく、子供達が主体的に参加して、仲間と深く考えながら課題を解決していく、そのアクティブラーニングには、そこにはどうしても、子供達が自ら原因とか答えを導き出して、問題を解決していく手助けをする、そこに徹する先生がいなくてはならないと、こう思います。そこは、凄く難しいことですよ。

放任しすぎてもいけないし、干渉しすぎてもいけないし。そうなってきた時に、教員の指導レベルというのが、凄く問われるようになってきている。

それで今、重ねられている教員研修を、先生方がアクティブラーニング、指導方法について自分から取り組んでいく、そういう方法について今後、いわき市教育委員会がこれからますます取り組んでいくことだと思います。

ですから、ぜひ南郷さんに教えて頂きたいな、ということ。私は今、お言葉を聞いただけでは、分からないんですよ。あつ、こんなことすればいいのかって言っても、実際どのように先生方が研修して、こんな風にやっているんだ今、ということはずごく勉強になると思うんですよ。そんなことを教えて欲しいなということを感じました。ありがとうございます。

(南郷副校長)

本当にこのアクティブラーニングの指導は難しく、国・数・英なんかは今、三つにクラスを分けて、習熟度別に。とても一つのクラスでそれだけの学力差がある子を育てられない、中学は同じ状況だと思います。

各授業で、アクティブにやろうとすると、当然、教科書を最初から最後までダークなめるよりも時間がかかる。教科書を最後までどうやって終わらせるか、君たちも悩みの中でやっていますので、私達としては全ての授業を子供達の話し合いを入れる必要はないと思います。子供達が主体的に学ぶようになればいい、頭の中がアクティブになればいいので。ということで、カリキュラム全体で考えて、一番子供たちの主体性を発揮する時間は、総合学習でもプロジェクト。これがあれば、国語学びたい、英語学びたい、社会学びたいという意欲が必然的に出てきますので、私は、総合教育会議ができた時に、すごく一番うれしかったのは、今まで学校というものが、どうしても、その一歩外に出た地域社会と、門で切り離されていて、先生達はあまり地域を知らない。異動してきて、3年ぐらいで出て行ったり。校長先生もちょっとしかいない。こうなっていましたが、カリキュラム全体が、地域社会の課題を見据えた、アクティブラーニングになっていければ。そういう意味では総合教育会議っていうのは、教育界と実際の、まさに今回の創生推進課さんが準備をされているってのはすごいな、と思うんですが、地域社会の未来は密接につながっている、校長もそうならなきゃいけないし、教員もそうだなって。カリキュラム全体をアクティブにしていく、というちょっと大きな視点で捉えた方がいい

のかな、なんて思っております。

(蛭田委員)

ただいま、山本委員の方から、現在と過去と、私は未来のことなどを考えていました。

また、私はもう一つですね、世界の中での立ち位置を、自分の立ち位置を確保して、その中から世界を見てらっしゃるなど感じました。

特にルーブリックの中で、先程おっしゃって頂いたDの表現発信力で、突然指名された時でも臆せず、集団の前で自分の意見が言える。それから、1番、レベル5ですね。多様な人々へ熱意とストーリーを持って、腑に落ちる形で説得力ある発信を行なえる。

実はですね、福島もいわきもこの震災以降、色々な支援を受けていると思うんです。各国からロータリークラブ、全世界のロータリークラブから、中学校宛にとか、いわき市宛にとか。それから、今私ちょっと関わっているところから、フランスからも小学校の方に「こういう支援をして欲しい」とかいう申し出がありました。これはとても嬉しいことで、子供達のためにも、これからのためにもなるな、と思えますが。これは裏を返すと、やはり私たちは、やっぱり被害者であるのかなっていう、確信もちょっと生まれてくるわけなんです。

放射線というのは、いわきの場合、私などは、まったく気にしておりません。多分いわきに住んでいる人もまったく気にしていないと思いますが、世界からみると「そうではないかもしれない」というところに、私は考えが至っております。

今、ふたば未来学園の方でも、このように生徒さんにも先生方も、こういう考えを持って教育をしている。私も実は前からいわき市の方に、「いわき独自の放射線教育はできませんでしょうか」と言うことを何度か申し上げているのですが、ちょっとここで私達も考えてみたいなと思いました。ありがとうございます。

(議長)

馬目さん。

(馬目委員)

震災の時に、この年ですと、最初に売れたのは、未来という言葉を使えば、もうそのまま儂さがもう常に伴っているということでした。経験して、それを孫や子供にその気持ちはなるべく抑えて、先生今おっしゃったように、未来へ向かって、新しい旅立ちをするんだ、ということはどう説明していくか、ということをお個人としても悩みました。

それは自身も、私自身が、家も大分被害にあったものですから、それはつくづく感じました。それで、教育委員会では、市全体として早く「教育の復興」ということで、いくつか会議を持ちまして、教育委員会自体の市独自の方針をとということで、先生今作りましたパンフレットのこの14ページの項目を早めたぐらいで、いわきは構想を練った

わけですね。

しかし、それもやはり色々な紆余曲折がありまして、同時には出来なかったわけです。一つひとつやっていくという以外になかったわけですが、このパンフレットと、先生の内容をお聞きしますと、いわき市全体でやっているようなことも一つの、つまりスモールな形で、学校でできるのか、ということ、それを「こういう風にすれば」というのを改めて学ばせて頂きました。

しかも、その中のこのテーブルですが、本当に良くできたものだと感心しております。このようなものを基本にして、これからの教育というものを作っていけば、我々が高校で学んだ教育とは別な、また新しい教育が拓けていくのではないかな、と思いました。

県立の高校で、これだけ未来に向かって教育をしているということは、本当に我々学ぶべきことが多くあると、今つくづく感じた次第であります。ありがとうございました。

(吉田教育長)

時間も迫っておりますので。これからの新しい学習として、ふたば未来学園も全国に紹介されております。つまり、こういう子供達にこういう資質能力を育てていかなければならないということが、今一番言われていて、これから先 10 年かけてそれをしっかりとやってくることが今、求められているわけです。

教育委員会としては、こういう取り組みはしておりますが、学校の中には置いてない、というのが率直な考えで、これはやっぱり学校の中で、先生方が少しでもこの取り組みというか、こうやって子供達の資質能力を育てていくんだ、という意識を先生方が持つようにしていくことが課題であると改めて思いました。

未来創造探究とか、総合学習をやっていることが、ふたば未来さんの非常に特徴的ですが、それを支える教科学習が、その辺の高校の先生方とは違う取り組みをしているなというのを感じております。

例えば、数学の授業・国語の授業も、我々がイメージしている高校の授業ではない、と思います。そういう工夫がたくさん見られるというところが凄くて、そこはしっかりと中学校も、本当に中学校レベルでも、本当に授業を見ていると、寂しくなるような授業が多いので、変えていかなければならないと。そのためには、研修であったり、環境整備を整えてあげなければいけないなという思いも今、強く持ちながら聞いておりました。ありがとうございました。

(議長)

双葉郡の町村、そしていわき市、自治体としての垣根はもちろんあるわけですが、実際、未来学園さんにいわき市の子供達がお世話になったり、あるいは双葉郡の子供さんがいわきの学校に通っていたりとか、あるいは同じ福島県、さらには同じ日本ということで、将来の子供達の為に、みんなで一丸となっていければと思いますので、南郷さん、

大変でしょうけど、頑張っていきましょう。

(南郷社長)

がんばります。

(議長)

時間もちょっと押しております。

今日の協議事項の2番目になりますが、次期学習指導要領の全面実施に向けた取り組みについて、事務局の説明がございます。

(学校教育課 塚本課長)

それでは、学校教育課の塚本でございます。次期学習指導要領の全面実施に向けた取り組みについて説明致します。座って説明をさせていただきます。

資料の1ページをご覧ください。まず、要件、教育要領、学習指導要領は全国において一定の教育水準を確保する為に、教育課程の基準として、文部科学省が定めるもので、幼稚園、学校での指導内容のもととなるものでございます。

概ね10年ごとに改定されております。改定のスケジュールにつきましては、下の図にありますように、この3月31日に改定が行われ、幼稚園は今年度の周知徹底期間を経て、平成30年度から全面実施、小学校では30年度から2年間の移行期間を経て平成32年度から、中学校では30年度から3年間の移行期間を経て、平成33年度から全面実施となります。

それに伴いまして、教科書の検定や採択も行われます。なお、移行期間中における対応に関しましては、その措置案が今般、公表されたところでございまして、移行期間中から先行して実施しなければならない内容や、実施可能な内容もございまして、今後パブリックコメントを経て、決まる予定でございまして。

具体的な取り組み、まず幼稚園につきましては、こども支援課さんの方から説明がございます。

(こども支援課 志賀課長)

こども支援課長の志賀でございます。私の方からは幼稚園、教育要領、それから保育所保育指針の改定のポイントについてご説明させていただきます。着座にてご説明させていただきます。

はじめに、幼稚園教育要領の改訂について、ご説明させていただきます。資料の方は2ページになります。幼稚園教育要領の改訂の大きなポイントでございまして、幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確にした、というところがございます。

この幼稚園教育において、育みたい資質・能力につきましては、三つの柱が明記され

てございます。

柱の一つは、「豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり」できるようになったりする知識及び技能を築く。

二つ目は、気づいたことや出来るようになったことなどを伝え、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする思考力・判断力・表現力等の基礎。

三つ目は、心情や意欲、態度が育つなかで、より良い生活を営もうとする、学びに向かう力、人間性等でございます。

幼稚園教育は環境を通して行なうもので、縁起ある全てのもの。例えば、積木や絵本、砂場とかクラッカー、天候等、そういったものも教材と成りうるもので、幼児期の特性を踏まえまして、遊びを通しての総合的な指導を実施することで、柱となる三つの基礎を身に付けていく。こうした指導の積み重ねによって、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を実現し、またのその姿を小学校と共有化することで、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の強化を図っていかうとするものでございます。

次に、保育所・保育士の改訂についてでございますが、資料は3ページになりますが、幼稚園と同様、平成29年度周知、平成30年度からの実践という形になります。

ただいまご説明致しました、幼稚園教育要領と見比べていただくと、お分かりの通り、3歳児以降の幼児期は、ほぼ同じ内容となっております。従いまして、幼児教育全体を考えました時に、保育所が果たす役割は、幼稚園と同様に重要なものになってございます。

また、今回の改訂では、乳児期の関わりの重要性について記載が充実されたところでございます。背景にはまず、利用者の増加というものが挙げられますが、自尊心や我慢強くやり抜く力など、自己に関わる力。あるいは、他者との関係をつくって維持する力、いわゆる、近維持能力。そういったものを、乳幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせる、というような研究結果などから、乳幼児期とりわけ3歳未満児の教育の重要性が高まっていることが挙げられます。

そして、小学校との連携の強化、この点につきましては、特に力を入れて参りたいと考えてございます。

今後におきます取り組みのポイント二点ございます。一つは、資質と専門性の向上というところでございまして、具体的に申し上げますと、例えばイタズラをして保育士に注意された、叱られた二歳児の子がいたとします。その子が昼寝の時に、その保育士のところにわざわざ来て、「おやすみなさい」と言ったんです。その時、その叱った保育士は、「私との関係を修復しないと眠れなかったのかもしれない」と考えて、その子の感受性の豊かに気づき感動した。そのことを迎えにきた親に伝えた。

この事例、エピソードでございますが、東京家政大学で講師をされている方の著書からも見ることもありますが、そのような、出来る・出来ないといった経過からの指導ではなくて、子供の多様性を認めて、子供の力を理解して、通訳して親に伝える。そのよ

うな保育士・幼稚園教諭の専門性を育てていく、ということが一つ。また二つ目は、職員同士が支え、育てあう職場環境。そういったものに、その二点に視点をおいて、今度取り組んでいきたいと考えてございます。

最後に、小学校にも連携強化に向けて、現在検討予定している事項について、申し上げさせていただきます。

一つは、一日保育体験時でございまして、幼稚園と比較いたしまして、保育所は連携が比較的手薄な現状にございます。主に、小学校低学年の先生が、夏休みなどの長期休暇期間を利用して、近隣の保育所で保育に関わって、保育の方法論にも触れながら、共通理解を深めるというもので、実は昨年度、田人小学校・田人保育所で、モデル的に実施させて頂いたところでございます。本年度は、参加希望が拡大致しまして、11校で実施する予定としてございます。それから、保幼小連携協議会という組織を本年度、設置致しまして、専門家の助言を頂きながら、保幼小の連携の方向性や具体的な連携プログラムを学習指導要領の移行期間中に作成して参りたいと考えてございます。

この件につきましては、進め方を含めて現在検討中でございますが、教育委員会の協力を頂きながら、進めて参りたいと考えてございます。

以上、改訂のポイント等踏まえながら今後の実践につなげて参りたいと考えてございます。

こども支援課からは以上でございます。

(学校教育課 塚本課長)

続きまして、再び学校教育課の方からご説明致します。4ページをご覧ください。

改訂のスケジュールにつきましては、先程説明した通りでございますが、先程もお話した通り、来年度からの移行期間、あるいはその後の全面実施に向けまして、準備対応していかなければならない点が多数ございます。

改訂の主な取り組みにつきましては、図に示したように、社会とのつながりの中で、学校教育を展開していくことが様々な課題を乗り越え、未来を切り拓いていく原動力になるとの考えから、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となる為に必要な知識・必要な資質能力を育む、社会に開かれた教育課程を実現することが示されております。

その理念のもと、何が出来るようになるか、の視点で新しい時代に必要となる、資質能力の養成と、学習教科の充実を図ると。具体的には、学びに向かう力、人間性等の涵養、生きて働く知識・技能の習得、そして、思考力・判断力・表現力等の育成であります。そして、この何が出来るようになるかの視点から、育成を目指す資質能力を整理し、その整理された資質能力を育成する為に、何を学ぶかの視点で、例えば、小学校外国語教育の早期化あるいは教科化、特別の教科道徳の実施など、教科・科目等の新設や目標・内容の見直しがなされています。

更に、その具体的な学びの姿として、どのように学ぶかの視点から、先程からやりま

した、主体的・対話的で、深い学びの視点から学習課程の改善が求められております。

授業時数につきましては、右側にありますように、小学校では3・4年生に外国語活動の導入による35時間の増加、5・6年生ではこれまで外国語活動として35時間実施していましたが、外国語という教科として導入され、時間も35時間増えて、計70時間となります。中学校では標準授業時数は変更はございません。

なお、道徳教育につきましては、小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度から教科化となります。

続きまして5ページをご覧ください。こうした学習指導要領改訂に伴いまして、想定される課題と致しましては、大きくは授業時数の増加の対応や、あるいは教員の指導力向上など人への対応、もう一つは教科の指導において、ICTの活用・いわゆる情報通信技術を活用した学校教育、いわゆるデジタルテレビ・コンピューター・インターネット環境の中で、教育の質を向上させるような、そういう教育ですが、そういうICT教育の部分で、ICTの活用が求められるなど、教育環境への対応、そういったものに整理致しました。

具体的には、主体的・対話的で深い学びの実現のために、一方向的な知識や技能の伝達からの転換、学びの量・質、深まりの重要性と授業の工夫・改善。

二つには、ICT教育推進の為に、教科指導におけるICTの活用。プログラミング的思考の育成とそれに伴うプログラミング教育の必修化が挙げられます。

三つ目として、外国語教育の推進として先ほど説明しましたように、外国語活動の導入、外国語の教科化への対応が挙げられます。

さらに、四つ目といたしましては、授業時数の増加に伴いまして、教員の多忙化の課題がございまして、授業改善の為に研究時間、研修時間の確保でありますとか、とりわけ先ほど説明しました、ICT教育に向けて、ICT活用のスキル、指導力の向上、更には外国語教育に向けて、外国語力、英語力ですね、指導力の向上の為に研修時間の確保、そうした課題が挙げられるところでございます。

次に6ページをご覧ください。これらの課題を踏まえまして、本市の小中学校における次期学習指導要領の全面実施に向けまして、重点的に取り組む事項としまして、「三本の矢」という形でお示しを致しました。

まず第一の矢は、教育のICT化への対応、グローバル人材の育成であります。ご存じのように、人工知能の進化により、2045年問題と言われるように、人工知能が人間の知能を超え、人工知能やロボットに変わっていくということで、今の仕事がなくなっていく、そういう時代がやってくること。また、学習指導要領の改訂によって、プログラミング教育が導入されたり、あるいはSTEAM(ステム)教育、いわゆるSTEM教育というのはですね、Science・Technology・Engineering・Arts・Mathematics、それぞれの単語の頭文字をとったもので、いわゆる科学・数学・芸術領域に力を入れていくと。そういう教育方針・教育方向のもとで、元々はアメリカの方で理数系の人材育成に力を入

れる動きが盛んになったということで、オバマ大統領あたりがですね、演説で、最優先に取り組むべきことだっという風にして、演説の中でもお話をしているのが、STEM教育ということで、そういった事が提唱されたり、先程の外国語教育がスタートし、全国学力学習状況調査においても、調査科目として英語が追加される予定であることなどから、それなりに対応する為に、本市におきましても環境整備とイノベーション創出力の強化を図る必要がございます。

その一つとしては、教育の情報化を推進し、デジタル教科書の整備、無線LAN、無線LAN といいますのは、LAN というのは元々、企業内・ビル内みたいに限られた地域で、複数のコンピュータを通信回線で接続する、そういうネットワークのことをLAN といいますが、それをケーブルを使わずに、赤外線あるいは電波によって通信を利用した、そういう環境が無線LAN ですけども、そういった無線LAN の製品と、タブレット端末の導入を図っていくこと。

また、外国語教育の推進として、ALT につきましては、外国語教育の早期化、教科化に向けて、まだまだ不十分であることから、拡充を図っていくこと。さらには、ALT の生活や、あるいは教育委員会、学校現場における活動の連絡調整などを行なう、JET プログラムコーディネーターと呼ばれるものですが、そういった配置による教育環境の充実を図ること、英検等の民間試験の活用を図ることなどが、必要であると考えます。

次に7ページをご覧ください。第二の矢は、学力向上、教員の指導力向上でありまして、全国との比較・分析を通して、教育指導の充実・着実な学力向上を図ることでありまして。具体的には、キャリア教育の推進と致しまして、エリム等の活用による将来の生き方を主体的に考える環境整備、土曜日等の学習支援の推進、教員の指導力向上として、民間教育業者との連携など、あるいは更には、学校図書館の機能の充実として、これまで学校司書の全校配置によって、確実に成果を収めているところですが、更に、学校図書館への新聞配備によって、新聞を活用した事業等によって、学力向上を図っていくことも必要であると考えます。

最後に、第三の矢としては、教員の多忙化解消であります。国におきましても、働き方改革が進められているところですが、点線枠にございますように、勤務実態等の各種調査においても、多忙化の実態が明らかになっているところがございます。国におきましても、深刻な事態として受け止め、教職員の負担軽減に本格的に取り組む方針を示しております。

本市においても、それらの課題を踏まえまして、教員のワーク・ライフ・バランスを確保すると共に、業務の負担感率の低減を図る必要があると考えます。

具体的には、国でも唱ってますように、チーム学校の推進ということで、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーなど、教員以外の専門スタッフの充実を図ること。更には、中学校教諭の多忙化の一因ともなっております、部活動における部活動指導員の位置付け・活用を図っていくことでもあります。

また、校務の情報化の推進ということで、校務支援システムの導入により、校務文書に関する業務やサービス管理上の事務等の管理を標準化しまして、業務の効率を図っていくことも必要であるという風に考えているところでございます。

教育先進都市の実現を掲げている本市におきましては、いわき市教育大綱の基本目標であります、未来に夢をもってふるさとを支え、日本を支え、そして世界に飛躍する人づくりのもと、次期学習指導要領の全面実施に向けまして、学校の指導体制の充実、教育環境の充実、これに努めていかなければならないという風に考えます。

説明は以上でございますが、8ページの参考資料であります、地方財政措置による教育環境整備につきましては、渡邊学校教育推進室長がご説明を致します。

(渡邊学校教育推進室長)

学校教育推進室長の渡邊でございます。

私からは、地方財政措置による教育環境整備について説明をさせていただきます。座って失礼致します。

8ページの資料をご覧ください。右上に参考資料と書いてあるものです。こちらの資料でございますけれども、地方財政措置といわき市の取組みの関係性を表した図になります。

見方について、簡単に説明させていただきますが、まず左側の枠は、平成29年度、予算措置されています、教育環境整備に係る事業一覧になります。次に右側の枠でございますけれども、学習指導要領の実施等を踏まえ、待ったなしで実施しなければならない取組みになります。

枠の色は、緑・オレンジ・青に分かれておりますが、これらの色は6ページ・7ページのそれぞれ矢の色とリンクするようになっております。そして、中央の枠でございますけれども、初等・中等教育環境の地方財政措置されている、教育環境整備計画を記載してございます。

そもそも、地方交付税等の地方財政措置とは何かと申し上げますと、国庫補助金等の特定財源とは異なりまして、あくまで地方自治体の一般財源である為、使い道が自由なお金でございます。主な初等・中等教育関係の地方財政措置にかかる計画は4つございまして、まず一つ目、教育情報化の整備にかかるもの。次に二つ目と致しまして、学校教材整備にかかるもの。そして三つ目、学校図書館整備にかかるもの。最後に、英語教育推進にかかるものとしたしまして、JETプログラムがございまして、

これらの、地方財政措置といわき市の取組みの関係性について示させて頂いた図がこの図でございますが、一番上の教育の情報化を例にあげ、関係性について簡単に説明させていただきますと、まず一番上の教育の情報化の中から、それぞれ左と右に、二本の矢印が伸びていると思います。まず、左の青字の矢印は、コンピュータ教育授業、小・中学校教職員情報化推進事業へ。そして、右の赤字の矢印は、デジタル教科書の整備、

無線 LAN の整備、タブレット端末の導入の枠と、校務支援システムの導入に伸びています。この矢印の意味は、これらの事業を実施するために、地方財政措置が計画され、交付税措置されていることを表しています。

この中央に記載されている、地方財政措置の計画は、一般財源の為、先程話しましたがけれども、使用の用途が自由なお金でございます。

実は私、昨年度まで文科省におりまして、文科省からきた立場から申し上げますと、これらの計画を有効活用し、更なる環境整備の充実を図って頂きたいという思いはあるんですが、なかなか各自治体においても、国が定めた計画通りに活用されていないという現状があるようです。

余談でございますけれども、文科省の担当者がそのような状況を踏まえまして、全国会議の行政説明等で地方財政措置を活用して、教育環境整備の一層の充実を呼び掛けているのが現状でございます。

私、彼らの努力を知っておりますので、ぜひとも地方財政措置が教育環境整備の為に有効活用されればと、本当に思っております。

最後になりますけれども、次期学習指導要領の円滑な実施を図る意味でも、子育て・教育先進都市の実現を図る意味でも、右枠に記載させております、重点化を要する取り組みの実施に合わせてはと考えております。

学校教育推進室としましては、せつかく地方財政措置されておりますので、速やかに実施されればと考えております。以上でございます。

(議長)

はい、ありがとうございます。教育長のまとめで。

(教育長)

もう、時間が経ってきていますよね。

もしあれでしたら、せつかくの機会ですので、いまうちの課の方が新しい学習指導に向けての話をしてくれましたので、具体的に学校現場って、どういう風に捉えているのかとか、そういったことも生で見た方が良いのではないかと考えております。ですから、我々、直接先生方に話を聞く機会もなかなかいつもないので、市長さんも含めて、次回あたり、市長さんのご都合をみながら、是非学校現場にみんなで足を運んで、そして授業を見たり、それから現場の先生方にご協力を頂いてちょっと話を聞くとか、そういう機会を入れながら、今回の学習指導要領改訂に向けてっていうようなことも、率直な意見なども聞いてみるのが、すごく大事なのかなということで、お二人来て頂いているので、長い時間もあれでしょうから、その辺で、次回にということもあるんじゃないかな、ということで提案です。

(議長)

只今、教育長からそういうお話がありましたので、次回開催の折には、教育委員会と詰めて、現場の方で開催するような方向で検討して下さい。

あと、みなさんから「これは」ということはありますでしょうか。

(特になし)

では、時間となりましたので、以上を持ちまして、議長の職を取らせて頂こうと思えます。

5 その他

6 閉会

(司会)

市長、ありがとうございました。

その他、協議事項以外で何かございますでしょうか。

ないようでしたら、次回の会議の日程につきましては、先程ありました通り、現場での視察を検討するということではありますが、昨年度同様、今回を含めまして、約三回程度開催を予定しておりますが、開催時期につきましては、改めて通知をさせて頂きたいと思いますので、よろしくお願い致します。

ちょうど時間となりましたので、以上をもちまして、平成 29 年度第 1 回いわき市総合教育会議を閉会致します。ご協力ありがとうございました。